

2017 年度
関西福祉科学大学大学院
社会福祉学研究科
心理臨床学専攻

修士論文題目

高校生の非行化傾向からの脱却についての研究
－アタッチメントの視点から－

指導教員（ 谷向みつえ教授 ）

社会福祉学研究科心理臨床学専攻

学生番号 11620002 氏名 斧田美子

目 次

I	目的	1
II	方法	3
1	実施 方法と対象者	3
2	質問紙の構成	4
III	分析 1	5
1	結果	5
2	考察	12
IV	分析 2	14
1	結果	14
2	考察	18
V	まとめの考察	20
VI	引用文献	21

高校生の非行化傾向からの脱却についての研究 ーアタッチメントの視点からー

I 目的

アタッチメント

幼い時の養育者との関りの中で育まれるものに、アタッチメントがある。アタッチメントとは、危機的な状況に際して、あるいは潜在的な危機に備えて、特定の対象との近接を求め、また、これを維持しようとする個体（人間やその他の動物）の傾性であり（Bowlby, 1969/1982）、不安や恐れといったネガティブな情動状態を、他の個体とくつつく、あるいは絶えずくつついていることによって低減・調節しようとする行動制御システムのことである（遠藤、2005）。アタッチメントは、最初は主に母子関係の中で発達し、成長とともに母親以外の人物との間でも築かれる。アタッチメントは、アタッチメント対象が、子どもが必要なときにそばにいてくれるかどうか（近接可能性）、また、子どもが出すサインに対してアタッチメント対象が適切に応じてくれるか（応答性）に左右される。高ければ、自分は必要とされていて、助けられたり愛されたりするに値する存在（自己受容）だと思えるようになり、そして、アタッチメント対象は必要なときに援助してくれる存在であると思える（他者信頼）ようになる。一方、アタッチメント対象の情緒的利用可能性や応答性が低ければ、自分は必要のない、助けられたり愛されたりするに値しない存在だと思えるようになり、そして、アタッチメント対象は必要なときに援助してくれる存在ではないと思えるようになる。こうして自他の有効性への確信を形成し、子どもは自己の中にアタッチメントを内的作業モデルとして取り入れていく。この内的作業モデルに基づいて状況の解釈や行動の予測、プランニングをするようになる。このような内的作業モデルは、生後 6 ヶ月から 5 歳くらいまでの段階の経験が重要で、そこから長ずるに従って可塑性を減じていくと、Bowlby (1973) はしている。内的作業モデルは可塑性を減じながら、15 歳ころまでに形成され、その時期までに形成されたものは一生を通じて比較的变化することなく持続する傾向があるという（粕谷・菅原、2001）。また Bowlby (1973) は、アタッチメントを個体が自律性を獲得した後でも、形を変え、まさにゆりかごから墓場まで、生涯を通じて存続するものと仮定している。

アタッチメントスタイル

Ainsworth, Blehar, Waters & Wall (1978) は、Strange Situation 法という手法を用いて、幼児の養育者との分離経験から観察された反応にパターンがあることに注目して、アタッチメントを、安定 (secure) 型・回避 (avoidant) 型・アンビバレント (ambivalent) 型に分類した。安定 (secure) 型では、対象との関係から安心感を得ることができ、その関係を安全基地として、対象から自由に離れて行動することができ、回避 (avoidant) 型は、他者や外界に対

する関心を防衛的に排除し、アタッチメント対象を、あるいは親密なアタッチメント関係を避けるという性質を持し、アンビバレント（ambivalent）型は、対象との親密さを望むものの、絶えず分離の不安を抱き続けるタイプである（佐藤, 1993）。特に、回避型の乳児は、その後の乳児期や児童期の対人関係における困難性を増加させ（Sroufe & Waters, 1979）,後に問題行動を発生させやすくなるという（数井, 2005）。

Ainsworth et al. (1978) の 3 分類は、幼少期の子どもの実験的行動観察の中で確認されたものであるが、その後の青年期、成人期のアタッチメント研究でもアタッチメントタイプ分類のひとつとして採用されるようになった。Hazan & Shaver (1987) は、青年期の恋愛関係をアタッチメント関係と捉えて研究する際に、3 分類を採用した。また、アタッチメントをタイプに分類するのではなく、同一個人内に各タイプが特性として存在しており、その中で特に個人にとって優勢なタイプが表出するという特性論も現れた（Collins & Read, 1990）。

不安定なアタッチメント

幼少期に、養育者との間に十分安定したアタッチメントが形成されていると、成長して養育者以外の人とも安定した関わりを持つことができ、社会適応もしやすいといわれる。成人のアタッチメントスタイルと感情との関連を検討した研究（牧野, 2016）によると、安定型のアタッチメントスタイルは、喜びのようなポジティブな感情経験も、不安などのネガティブな感情経験も適度に表出できていたという。一方、回避（avoidant）傾向が高いと、自身の中に生じたさまざまな感情を外に出すことをためらい、抑制しやすくなっており、コミュニケーションの欠如を伴い問題行動に繋がる可能性があるとしている。また、アンビバレント（ambivalent）傾向に関しては感情抑制との関連は認められなかったとのことである（牧野, 2016）。

このように、幼い時に養育者との間で十分な関わりが持たれずに、不安定なアタッチメントが形成されてしまうと、その後の成長途上において、危機的な場面に直面した時にうまく対処できない可能性がある。特に、対人関係において問題が生じ、そのために学校や社会において適応できずに問題行動を起こす可能性もある。

アタッチメントの修正

しかし、子どもが養育者との間に不安定なアタッチメントを形成したとしても、その後にその子どもの養育に継続的に一貫して関わる人物が現れれば、アタッチメントは修正され安定していくといわれ、その際のアタッチメント対象者は母親や養育者ではなく、誰であってもよいということも言われるようになった（van IJzendoorn, Sagi & Lambermon, 1992）。そして、数井（2005）は、小中学校における教師と子どもとの関係では、心理的な安心感を与えることや

導き教えるという教育ガイダンスを与えることなどがアタッチメントの機能として考えられるとし、教師がアタッチメント対象となりうる可能性があるとし唆している。

前述したように、先行研究ではアタッチメントの可塑性は年齢とともに減じ15歳までにほとんど形成されるとしている（粕谷・菅原，2001）。しかし、本研究者の経験の中で、高等学校において入学時に問題行動を起こす生徒が高等学校の3年間で、教師を含むさまざまな人物と良好な関わりを持つ中で問題行動が減じていく姿を目にしてきた。

そこで、本研究ではアタッチメントが修正されるのに影響を与えたものを、人との関りであるとし、その重要な関りをする人として、養育者以外の人物との関りであると考え。また、アタッチメントの可塑性が減じて修正が困難に見える高等学校においても、人との良い出会いや関りがあれば不安定なアタッチメントが修正され、情動制御が可能となり、問題行動が減るという仮説を立て、本研究によって検証しようとするものである。

ここで、

- i 幼少期の不安定なアタッチメントスタイルは、アタッチメントスタイルがほぼ形成される15歳以降であっても、高等学校の教師などとのその後の良好な対人関係を通して修正されうる。
- ii 修正されたアタッチメントにより、高校生の情動が調整され、社会性の醸成と行動が修正される。

を仮説として研究を進めていくこととする。特に、本研究では、高校生特有の問題行動に着目して研究を進めるものとする。

また、高等学校は選抜入学試験により生徒が選別されており、学校による差異が考えられる。そこで本研究では、校風の違いにも注目して研究を進めることとする。

II 方法

1 実施方法と対象者

A 県の公立高等学校の B 高等学校と C 高等学校の 1～3 年生を対象にクラスごとの一斉法により無記名式で調査を実施した。クラス担当教員が授業時間内に調査票を配布した。生徒には、回答後調査表を封筒に入れ封をしてもらい、回収した。これは、調査票の内容が教師やほかの生徒に見られ、生徒個人の不利益とならないように配慮するためであった。

回収した質問紙のうち、回答に同意した 840 名を分析対象とした。内訳は、B 高等学校が 216 名（1 年生 94 名、2 年生 54 名、3 年生 68 名）、C 高等学校が 624 名（1 年生 221 名、2 年生 220 名、3 年生 186 名）であった。

調査実施日は 2017 年の 1 月と 2 月であった。

2 質問紙の構成

幼少期のアタッチメントの測定

酒井（2001）の幼少期母子関係イメージ尺度を利用した。酒井（2001）は、青柳・酒井（1997）が Ainsworth et al.（1978）の Strange Situation 法の安定（secure）群、回避（avoidant）群、アンビバレント（ambivalent）群の 3 群の内容を基に作成した質問紙（9 項目）と新たな項目（7 項目）を加えて項目を再編成し、就学前の母子関係を測るためにこの尺度を作成した。そのため、各群の名前を「就学前の安定的な母子関係」、「就学前の拒否的な母子関係」、「就学前のアンビバレントな母子関係」としているが、本研究では、「就学前の安定的な母子関係」を「幼少期の安定傾向」、「就学前の拒否的な母子関係」を「幼少期の拒否傾向」、「就学前のアンビバレントな母子関係」を「幼少期のアンビバレント傾向」と名前を一部変更して使用した。この尺度は、小学校入学以前（6 歳以前）の母親との関係を回想してもらって回答してもらうものであるが、本研究では、「母親」を「養育者との関係」と捉え、「小学校に入学する頃まで、あなたを育ててくれた人」という質問に対して、“母・父・きょうだい・祖母・祖父・おば・おじ、その他”の中から複数選択で回答できるようにした。

各項目の文章表記に関しては、回答をお願いする高等学校の教員と協議の上、当該高校の生徒が理解できるように、質問の意図が変わらない範囲での言葉使用の変更を行った。また、酒井（2001）の母子関係イメージ尺度では、6 件法で回答を求めていたが、この件に関しても当該の高等学校教員と協議の上、“（4）当てはまる”～“（1）当てはまらない”の 4 件法で回答するように変更した。

現在のアタッチメント対象の選択

本研究では、現在のアタッチメント対象を限定せず、“現在「大切に思う人」または、「なくてはならない人」として、“母・父・きょうだい・友だち・学校の先輩・彼女または彼氏・片思いの人・小学校の先生・中学校の先生・高校の先生・クラブの仲間・アルバイトの人・いない・その他”の中から複数選択するようにした。

現在のアタッチメントの測定

現在のアタッチメントを測定する尺度としては、アタッチメント・スタイルの回避と不安の 2 側面を測定する尺度である ECR-RC9（Fralery, Hefferman, Vicary, Brumaugh, 2011）の日本語版（中尾・数井・村上, 2016）を使用した。ECR-RC9 は、近年スウェーデンにおいて、児童期におけるアタッチメントの個人差を簡易に測定することができる尺度として注目を集めているもので、中尾・数井・村上（2016）が、ECR-RS の日本語訳（古村・村上・戸田, 2014）および ECR-RC（Brenning, Soenens, Braet, Bosmans, 2011）を参考に、日本語訳を作成し、日本語版を作成した。ECR-RC9 は Fralery et al.（2011）が開発した ECR-RS と同じ項目になっており、回避 6 項目、不安 3 項目合計 9 項目の構成

になっている。ECR-RSは、さまざまな対人関係に適応できるように項目のワーディングの修正が行われて作成された尺度である。さらに、ECR-RC9は、児童が理解しやすいように項目のワーディングの修正が行われている。回答は“(4) 当てはまる”～“(1) 当てはまらない”の4件法で回答するようになっている。

また、適用年齢は、10～17歳となっているので、高等学校の生徒にも回答可能となっている。なお、オリジナルのECR-RC9のアタッチメント対象は「母親」であるが、本研究では対象を特定せず「その人」とした。

問題行動の経験の有無を問う項目

加藤・大久保（2006）の「問題行動の経験尺度」、金子（2006）の「学校内問題行動尺度」、坂井・山崎（2004）の「攻撃性尺度」を参考に、15項目からなる「問題行動経験尺度」を作成して回答してもらった。回答は、“(1) 一度もしたことがない、(2) 昔はしていたが、今はしない、(3) 今もする”の3件法で回答するようにした。

III 分析 1

1 結果

分析1では、2校のデータを一つにして、調査した高校生全体の幼少期のアタッチメントスタイルの安定、不安定に注目して分析を進めていった。

幼少期のアタッチメントスタイル得点に関して

本研究では、アタッチメントスタイルをカテゴリー的な視点で捉えるのではなく特性的な概念として捉え、安定得点、拒否得点、アンビバレント得点として分析する。各スタイル得点の平均と標準偏差は以下の通りである（表1）。

また、幼少期のアタッチメントスタイルの3つのカテゴリー間の関係を見るために、相関分析を行った（表2）。その結果、安定得点と拒否得点の間には弱い負の相関が認められ、アンビバレント得点の間には弱い正の相関が認められた（安定得点と拒否得点； $r = -.29, p < .01$ 、安定得点とアンビバレント得点； $r = .24, p < .01$ ）。なお、拒否得点とアンビバレント得点との間には相関は認められなかった（ $r = .10, n.s.$ ）。

表1 幼少期アタッチメント得点の平均と標準偏差

	安定	拒否	アンビバレント
平均値	19.65	8.1	7.77
中央値	21	7	7
標準偏差	2.84	3.31	3.10

表2 安定・拒否・アンビバレント得点の相関

	安定		拒否
安定			
拒否	-0.29	**	
アンビバレント	0.24	**	0.1

** $p < .01$

幼少期のアタッチメント対象に関して

ここで、本研究では、『幼少期の不安定なアタッチメントが養育者以外の人との間で修正される。』と仮定するので、幼少期の安定・拒否・アンビバレントの得点をパーセンタイルを利用して、低群、中群、高群の3群(安定：低群 N=271, 中群 N=122, 高群 N=417, 拒否：低群 N=334, 中群 N=193, 高群 N=274, アンビバレント：低群 N=330, 中群 N=186, 高群 N=289)に分け、そのうちの高群と低群について比較を行った(表3)。

安定得点の低群と高群で、幼少期のアタッチメント対象に差があるかどうかについて t 検定を行ったところ、『母』と『父』には差がなく(母; $t=1.18$, $n.s.$, 父; $t=1.24$, $n.s.$)、『祖母』と『祖父』において有意な差が見られた(祖母; $t=3.84$, $p<.01$, 祖父; $t=2.88$, $p<.01$)。また、『自分を育ててくれた人の人数(対象人数)』においても有意な差が見られた。($t=3.28$, $p<.01$)。

拒否得点の低群と高群で、幼少期のアタッチメント対象に差があるかどうかについて t 検定を行ったところ、『母』には差がなく(母; $t=1.35$, $n.s.$)、『父』、『祖母』及び『祖父』において有意な差が見られた(父; $t=3.02$, $p<.01$, 祖母; $t=1.93$, $p<.05$, 祖父; $t=2.34$, $p<.05$)。また、『自分を育ててくれた人の人数(対象人数)』においても有意な差が見られた($t=2.23$, $p<.05$)。

アンビバレント得点の低群と高群で、幼少期のアタッチメント対象に差があるかどうかについて t 検定を行ったところ、『母』,『父』,『祖母』,『祖父』及び『自分を育ててくれた人の人数(対象人数)』における、どの項目にも差が見られなかった(母; $t=0.98$, $n.s.$, 父; $t=-0.51$, $n.s.$, 祖母; $t=0.01$, $n.s.$, 祖父; $t=0.27$, $n.s.$, 対象人数; $t=0.86$, $n.s.$)。

表3 安定・拒否・アンビバレント得点の高群、低群の幼少期のアタッチメント対象の比較

		安定得点				拒否得点				アンビバレント得点			
		低群	高群	t 値		低群	高群	t 値		低群	高群	t 値	
母親	M	0.96	0.98	1.24	$n.s.$	0.98	0.96	1.35	$n.s.$	0.97	0.96	0.98	$n.s.$
	(SD)	0.20	0.15			0.14	0.20			0.16	0.2		
父親	M	0.82	0.86	1.24	$n.s.$	0.87	0.77	3.09	$**$	0.82	0.83	0.51	$n.s.$
	(SD)	0.38	0.35			0.34	0.42			0.39	0.37		
祖母	M	0.55	0.70	3.84	$**$	0.65	0.58	1.93	$n.s.$	0.63	0.63	0.01	$n.s.$
	(SD)	0.50	0.46			0.48	0.50			0.48	0.48		
祖父	M	0.45	0.56	2.88	$**$	0.55	0.45	2.34	$*$	0.51	0.50	0.27	$n.s.$
	(SD)	0.50	0.50			0.50	0.50			0.5	0.5		
対象人数 (平均)	M	3.61	4.07	3.27	$**$	3.95	3.62	2.22	$*$	3.75	3.88	0.86	$n.s.$
	(SD)	1.78	1.81			1.79	1.80			1.77	1.83		

* $p<.05$, ** $p<.01$

幼少期のアタッチメントスタイル得点に関して

幼少期のアタッチメントスタイル得点の安定得点、拒否得点、アンビバレント得点に関して、安定・拒否・アンビバレントの各得点の低群と高群について比較してみた（表 4、表 5 参照）。

安定得点の低群と高群で差があるかどうかについて t 検定を行ったところ、安定、拒否及びアンビバレントのすべての合計得点において有意な差が見られた（安定； $t=28.48, p<.01$ ，拒否； $t=9.09, p<.01$ ，アンビバレント； $t=7.22, p<.01$ ）。

拒否得点の低群と高群で差があるかどうかについて t 検定を行ったところ、安定と拒否の合計得点において、有意な差が見られ（安定； $t=8.21, p<.01$ ，拒否； $t=36.71, p<.01$ ），アンビバレントの合計得点では有意な差は見られなかった（ $t=0.23, n.s.$ ）。

アンビバレント得点の低群と高群で差があるかどうかについて t 検定を行ったところ、安定とアンビバレントの合計得点において有意な差が見られた（安定； $t=6.16, p<.01$ ，アンビバレント； $t=47.67, p<.01$ ）。一方、拒否の合計得点においては有意な差は見られなかった（拒否； $t=1.00, n.s.$ ）。

表4 幼少期のアタッチメント項目

		<i>M</i>	<i>SD</i>
安 定	1私は、その人のそばでは安心感があつた。	3.72	0.63
	2その人と遊ぶのが楽しかった。	3.49	0.77
	3その人と出かけるのが嬉しかった	3.58	0.71
	4私は、その人が好きだった。	3.64	0.7
	5私は、よくその人にほめられた。	3.28	0.82
	6私は、その人が何をしても、それに関心がなかった。	1.95	0.88
拒 否	7私は、その人の愛情が薄いと思った時があつた。	1.61	0.91
	8いつか世話をしないで放っておかれるのではないかと思った。	1.52	0.86
	9助けてほしいときに、その人は助けてくれないことがあつた。	1.6	0.91
	10私が泣いていても、その人は私に関心がなかった。	1.34	0.7
	11私は、同じことをしても怒られる時と、怒られない時があつた。	2.01	1.00
ア ン ビ バ レ ン ト	12その人が出かける時には、私は無理やりついていこうとした。	2.03	1.01
	13幼稚園（保育所）に行っても、その人を思い出してずっと泣いていたことがあつた。	1.96	1.09
	14親戚の家に遊びに行っても、その人がいないと、怖かった。	1.97	1.07
	15その人がそばにいないと、夜眠れなかった。	1.82	1.01
	16何かあれば、その人はすぐに来てくれると思っていた。	2.67	1.09

表5 安定・拒否・アンビバレント得点の高群、低群の幼少期アタッチメント得点の比較

	安定得点				拒否得点				アンビバレント得点			
	低群	高群	t 値		低群	高群	t 値		低群	高群	t 値	
	$M(SD)$	$M(SD)$			$M(SD)$	$M(SD)$			$M(SD)$	$M(SD)$		
安定	16.55 (2.81)	21.55 (0.83)	28.48	**	20.45 (2.10)	18.47 (3.49)	8.21	**	19.09 (3.15)	20.41 (2.14)	6.16	**
拒否	9.67 (3.47)	7.26 (2.97)	9.09	**	5.37 (0.48)	11.82 (2.88)	36.71	**	7.92 (2.95)	8.19 (3.70)	1	<i>n.s.</i>
アンビバレント	6.78 (2.47)	8.40 (3.38)	7.22	**	7.79 (3.06)	7.85 (3.18)	0.23	<i>n.s.</i>	4.89 (0.84)	11.19 (2.11)	47.67	**

* $p < .05$, ** $p < .01$

現在のアタッチメント対象に関して

次に、現在のアタッチメント対象に差があるかどうかについて、安定得点の低群と高群で t 検定を行ったところ(表 6)、『母』、『父』、『友だち』及び『中学校の先生』において有意な差が見られ(母; $t=4.75$, $p < .01$, 父; $t=3.23$, $p < .01$, 友だち; $t=2.98$, $p < .01$, 中学校の先生; $t=2.87$, $p < .01$),『彼氏彼女』,『小学校の先生』及び『高校の先生』には差がなかった(彼氏彼女; $t=0.65$, *n.s.*, 小学校の先生; $t=0.76$, *n.s.*, 高校の先生; $t=1.59$, *n.s.*)。

また、拒否得点の低群と高群で t 検定を行ったところ,『母』,『父』,『友だち』において有意な差が見られ(母; $t=4.30$, $p < .01$, 父; $t=5.89$, $p < .01$, 友だち; $t=2.74$, $p < .01$),『彼氏彼女』,『小学校の先生』,『中学校の先生』及び『高校の先生』には差がなかった(彼氏彼女; $t=0.80$, *n.s.*, 小学校の先生; $t=0.96$, *n.s.*, 中学校の先生; $t=0.61$, *n.s.*, 高校の先生; $t=0.81$, *n.s.*)。

また、アンビバレント得点の低群と高群で t 検定を行ったところ、『母』,『父』,『友だち』,『小学校の先生』及び『高校の先生』には差がなかった(母; $t=1.15$, *n.s.*, 父; $t=0.13$, *n.s.*, 友だち; $t=0.01$, *n.s.*, 小学校の先生; $t=1.34$, *n.s.*, 高校の先生; $t=0.83$, *n.s.*)。一方、『彼氏彼女』と『中学校の先生』においては有意な差が見られた(彼氏彼女; $t=2.41$, $p < .05$, 中学校の先生; $t=2.51$, $p < .05$)。

また、『現在のアタッチメント対象の人数(対象人数)』においては、安定・拒否・アンビバレント得点の低群と高群で有意な差が見られた(安定得点の高群と低群; $t=4.33$, $p < .01$, 拒否得点の低群と高群; $t=4.00$, $p < .01$, アンビバレント得点の低群と高群; $t=2.53$, $p < .05$)。

表6 安定・拒否・アンビバレント得点の高群、低群の現在のアタッチメント対象の比較

		安定得点				拒否得点				アンビバレント得点			
		低群	高群	<i>t</i> 値		低群	高群	<i>t</i> 値		低群	高群	<i>t</i> 値	
母	<i>M</i>	0.80	0.93	4.8	**	0.93	0.81	4.48	**	0.87	0.90	1.15	<i>n.s.</i>
	(<i>SD</i>)	0.40	0.26			0.26	0.40			0.34	0.31		
父	<i>M</i>	0.66	0.77	3.2	**	0.80	0.59	5.89	**	0.71	0.71	0.13	<i>n.s.</i>
	(<i>SD</i>)	0.48	0.42			0.40	0.49			0.46	0.45		
友だち	<i>M</i>	0.79 <	0.88	3	**	0.87 >	0.78	2.74	**	0.82	0.82	0.01	<i>n.s.</i>
	(<i>SD</i>)	0.41	0.33			0.34	0.41			0.38	0.38		
彼女彼氏	<i>M</i>	0.19	0.21	0.7	<i>n.s.</i>	0.18	0.20	0.80	<i>n.s.</i>	0.16 <	0.24	2.41	*
	(<i>SD</i>)	0.39	0.41			0.38	0.40			0.37	0.43		
小学校の先生	<i>M</i>	0.09	0.11	0.8	<i>n.s.</i>	0.11	0.08	0.96	<i>n.s.</i>	0.09	0.12	1.34	<i>n.s.</i>
	(<i>SD</i>)	0.29	0.32			0.31	0.28			0.28	0.32		
中学校の先生	<i>M</i>	0.16	0.24	2.9	**	0.20	0.18	0.61	<i>n.s.</i>	0.17	0.25	2.51	*
	(<i>SD</i>)	0.36	0.43			0.40	0.39			0.38	0.43		
高校の先生	<i>M</i>	0.14	0.19	1.6	<i>n.s.</i>	0.17	0.14	0.81	<i>n.s.</i>	0.16	0.18	0.83	<i>n.s.</i>
	(<i>SD</i>)	0.35	0.39			0.38	0.35			0.36	0.39		
対象人数 (平均)	<i>M</i>	4.32 <	5.1	4.3	**	5.03 >	4.27	4.00	**	4.49	4.97	2.53	*
	(<i>SD</i>)	2.28	2.3			2.33	2.29			2.24	2.44		

* $p < .05$, ** $p < .01$

現在のアタッチメントの回避・不安の傾向に関して

次に、現在のアタッチメントの回避と不安の傾向に関して、幼少期のアタッチメントの安定・拒否・アンビバレントの得点の低群と高群で比較してみた（表 7、表 8 参照）。

安定得点の低群と高群で差があるかどうかについて *t* 検定を行ったところ、『回避』の合計得点においても、『不安』の合計得点においても有意な差が見られた（回避； $t = 8.20$, $p < .01$, 不安； $t = 2.39$, $p < .05$ ）。

拒否得点の低群と高群で差があるかどうかについて *t* 検定を行ったところ、安定得点低群と高群と同様に、『回避』と『不安』の両合計得点において有意な差が見られた（回避； $t = 7.07$, $p < .01$, 不安； $t = 9.70$, $p < .01$ ）

次にアンビバレント得点の低群と高群で差があるかどうかについて *t* 検定を行ったところ、安定得点の低群と高群と同様に、『回避』，『不安』の両合計得点において有意な差が見られた（回避； $t = 3.66$, $p < .01$, 不安； $t = 4.42$, $p < .01$ ）

表7 現在のアタッチメントの回避傾向と不安傾向をたずねる項目

		<i>M</i>	<i>SD</i>
回 避	1 いろいろなことについて、その人と話し合う。	3.55	0.77
	3 自分の本心を、その人に話す気がしない。	1.75	0.93
	4 困ったことや心配事があれば、たいてい、その人に話す。	3.12	1.00
	5 自分のことについて「多く」をその人に話すことは、気が進まない。	1.92	1.00
	7 つらいときは、その人に話すと楽になる。	3.17	0.93
	9 気軽にその人を頼れる。	3.43	0.83
不 安	2 その人は、自分をあまり好きではないかもしれない。	1.77	0.97
	6 自分がその人のことを大切に思うのと同じくらいに、その人が自分を大切に思ってくれているのか、気になる。	2.34	1.14
	8 自分がその人に本当に愛されているのか心配だ。	1.8	1.01

表8 安定・拒否・アンビバレント高群、低群における現在のアタッチメント得点の比較

	安定得点			拒否得点			アンビバレント得点		
	低群	高群	<i>t</i> 値	低群	高群	<i>t</i> 値	低群	高群	<i>t</i> 値
	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)		<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	
回避	11.94 (4.04)	> 9.41 (3.51)	8.20 **	9.41 (3.61)	< 11.07 (4.06)	7.10 **	10.86 (4.05)	> 9.72 (3.52)	3.66 **
不安	6.23 (2.62)	> 5.72 (2.67)	2.40 **	5.10 (2.45)	< 7.12 (2.56)	9.70 **	5.43 (2.47)	< 6.39 (2.81)	4.42 **

p* < .05, *p* < .01

問題行動の経験に関して

問題行動の経験に関する項目の因子分析

問題行動の経験に関する 15 項目について最尤法に基づく因子分析を行った（表 9）。固有値の値（第 1 因子から第 4 因子まで、4.25, 1.80, 1.27, 0.93）から判断し、3 因子を採用した。これらの因子に対し、プロマックス回転で因子分析を行った。15 項目のうち 1 項目を除いた 14 項目の因子負荷量は、0.4 以上の負荷量を示し、かつ 2 つの因子にまたがって 0.4 以上の値を示さなかった。第 1 因子には、“16 からかわれたらたたいたりけったりする”、“20 たたかれたら、たたき返す”、“3 人に乱暴なことをする”、“10 からかう”、“7 他の生徒に

無理やりやらせる”、という項目に高い負荷量が付与されたことにより、「粗暴的問題行動（対人）」と命名した。第2因子は、“5 理由もなく遅刻”、“4 授業中に抜け出す”、“8 異装”、“9 夜遊び”、“22 喫煙”の項目に高い負荷量が付与されたことにより、「自己中心的問題行動」と命名した。第3因子には、“23 友達をいじめたり、仲間はずれにする”、“14 遊ぶ相談に入れない”、“13 わざと隠す”、“11 嫌われるような噂話をする”の項目が入っていたため「非粗暴的問題行動」と命名した。クロンバックの α 係数は 15 項目全体で、0.80 で第1因子は 0.77、第2因子は 0.69、第3因子は 0.67 であった。

なお、“17 ものを壊す”は、本研究で構成概念として必要であるために、「粗暴的問題行動（対物）」として残した。

表9 問題行動の経験に関する尺度の因子分析結果 (N=804)

項目	1	2	3
第1因子: 粗暴的問題行動(対人) $\alpha = .77$			
16 からかわれたらたたいたりけったりする	0.83	-0.05	-0.09
20 たたかれたら、たたき返す	0.64	0.08	-0.14
3 人に乱暴なことをする	0.62	0.02	0.03
10 からかう	0.49	-0.07	0.23
7 他の生徒に無理やりやらせる	0.41	-0.04	0.27
17 ものを壊す	0.26	0.22	0.18
第2因子: 自己中心的問題行動 $\alpha = .69$			
5 理由もなく遅刻	-0.05	0.69	-0.04
4 授業中に抜け出す	0.05	0.60	-0.03
8 異装	-0.15	0.56	0.10
19 夜遊び	0.19	0.48	-0.03
22 喫煙	0.06	0.43	0.03
第3因子: 非粗暴的問題行動 $\alpha = .67$			
23 友達をいじめたり、仲間はずれにする	-0.05	0.03	0.67
14 遊ぶ相談に入れない	-0.12	0.04	0.64
13 わざと隠す	0.17	-0.08	0.52
11 嫌われるような噂話をする	0.02	0.02	0.51
寄与率	28.32	12.03	8.47
累積寄与率	28.32	40.35	48.82
因子相関行列			
1	1	0.36	0.61
2		1	0.37

安定、拒否、アンビバレント得点の低群、高群と問題行動の経験の関係に関して

次に、各因子の合計得点を問題行動得点として算出した（表 10）。問題行動の「粗暴的問題行動（対人）」、「自己中心的問題行動」、「非粗暴的問題行動」及び「粗暴的問題行動（対物）」に関して、安定得点の低群と高群で差があるかどうかについて t 検定を行ったところ、「粗暴的問題行動（対人）」の合計得点と「粗暴的問題行動（対物）」の合計得点において有意な差が見られた（粗暴的問題行動（対物）； $t=2.82, p<.01$, 粗暴的問題行動（対物）； $t=2.26, p<.05$ ）。しかし、「自己中心的問題行動」と「非粗暴的問題行動」の得点には有意な差は見られなかった（自己中心的問題行動； $t=1.49, n.s.$, 非粗暴的問題行動； $t=0.40, n.s.$ ）。

また、拒否得点の低群と高群で差があるかどうかについて t 検定を行ったところ、「自己中心的問題行動」の合計得点において有意な差が見られた（ $t=3.82, p<.01$ ）。しかし、「粗暴的問題行動（対人）」、「非粗暴的問題行動」及び「粗暴的問題行動（対物）」の合計得点においては、有意な差が見られなかった（粗暴的問題行動（対物）； $t=1.38, n.s.$, 非粗暴的問題行動； $t=1.93, n.s.$, 粗暴的問題行動（対物）； $t=1.61, n.s.$ ）。

また、アンビバレント得点の低群と高群で差があるかどうかについて t 検定を行ったところ、いずれの問題行動にも有意な差が見られなかった（自己中心的問題行動； $t=0.47, n.s.$, 粗暴的問題行動（対物）； $t=1.62, n.s.$, 非粗暴的問題行動； $t=0.44, n.s.$, 粗暴的問題行動（対人）； $t=0.43, n.s.$ ）。

表10 安定および拒否得点高群、低群の問題行動経験の比較

	安定得点				拒否得点				アンビバレント得点			
	低群 <i>M(SD)</i>	高群 <i>M(SD)</i>	<i>t</i> 値		低群 <i>M(SD)</i>	高群 <i>M(SD)</i>	<i>t</i> 値		低群 <i>M(SD)</i>	高群 <i>M(SD)</i>	<i>t</i> 値	
粗暴的問題行動（対人）	3.50 (2.52)	2.95 (0.16)	2.82	**	3.01 (2.47)	3.29 (2.50)	1.38	<i>n.s.</i>	3.10 (2.55)	3.02 (2.27)	0.43	<i>n.s.</i>
自己中心的問題行動	2.12 (2.22)	1.87 (2.12)	1.49	<i>n.s.</i>	1.71 (1.94)	2.41 (2.40)	3.82	**	1.99 (2.14)	2.07 (2.20)	0.47	<i>n.s.</i>
非粗暴的問題行動	1.12 (1.50)	1.07 (1.46)	0.4	<i>n.s.</i>	0.91 (1.27)	1.13 (1.55)	1.93	<i>n.s.</i>	0.98 (1.37)	1.03 (1.44)	0.44	<i>n.s.</i>
粗暴的問題行動（対物）	0.30 (0.52)	0.21 (0.47)	2.26	*	0.21 (0.47)	0.28 (0.50)	1.61	<i>n.s.</i>	0.26 (0.49)	0.20 (0.46)	1.62	<i>n.s.</i>

* $p<.05$, ** $p<.01$

2 考察

分析 1 では、幼少期のアタッチメントスタイルの安定・拒否・アンビバレント得点の高低に注目して、分析を進めた。幼少期安定得点の高群は、現在のアタッチメントスタイルの回避、不安得点ともに低く、幼少期拒否得点の高群

は、現在のアタッチメントスタイルでも回避得点が高かった。また、アンビバレント得点の高群は、現在のアタッチメントスタイルの不安得点が高くなっていた。これは、先行研究（粕谷・菅原，2001）で言われている、アタッチメントスタイルが15歳までにおおよそ形成されるという結果と一致する。

問題行動に関して、幼少期拒否得点高群は、自己中心的問題行動に集中しており、粗暴化はしていないことが伺える。Mikulincer(1998)によると回避型には、情動制御や情報処理のあり方として抑圧的な方略(Shaver & Mikulincer, 2002)が用いられているという。この方略は不快な情緒や情報を意識から排除することで自己の安定を図ろうとするというもので、本研究における拒否得点高群においても、不快な情緒につながりかねない、直接人と関わる対人粗暴的問題行動や非粗暴的問題行動、さらには結果的に不快な情動に繋がりがねない対物粗暴的問題行動を避け、自己中心的問題行動にとどまっていると考えられる。

それに対して、幼少期のアタッチメントスタイルの安定得点の低群では、対人・対物粗暴的問題行動に有意差が出ており、幼少期にアタッチメントが安定していないことは、アタッチメントが拒否的である以上に問題が大きい。

牧野(2016)は、アタッチメントスタイルが安定している人ほど、陽性感情も陰性感情も適度に表出できるという研究結果を得ている。この結果は、アタッチメントが安定していることが情動をコントロールし、不安感情などの陰性感情も喜びなどの陽性感情も適度に表出できること示しており（牧野, 2016）逆に安定得点が低い場合、情動のコントロールが不安定となり衝動的な行動に陥りやすいといえる。

また、幼少期のアンビバレント得点の低群、高群に関して、現在のアタッチメントの回避得点と不安得点に有意に差があり、幼少期に養育者とのアタッチメント関係が現在の対人関係において影響を与えているように思われる。しかしながら、アンビバレント得点が高いことが問題行動の種類や量にかかわっていないと思われる。牧野（2016）は、愛着スタイルにおけるアンビバレンスは、他者との関係性において、常に両価的な価値基準の板ばさみになったり、葛藤状態に置かれたりしやすいことにつながり、そのため、感情表出場面において、自分が表出した感情を相手がどのように受け止めるのかについて、両価的な判断基準の狭間で葛藤を抱えやすいことが予想されるとしている。このことから考えるに、アンビバレント得点が高いと、常に他者を意識するあまり問題行動につながらないのではないだろうか。また、本研究では、アタッチメントスタイルを個人内の特性と捉えており、幼少期のアタッチメントスタイルの安定得点とアンビバレント得点には正の相関が見られることから、アンビバレント得点が高くて、安定得点も高いと考えられ、そのことが問題行動にいたらなくしているともいえよう。

IV 分析 2

1 結果

分析 2 では、B 高等学校と C 高等学校の幼少期のアタッチメント対象とアタッチメントスタイル、現在のアタッチメント対象とアタッチメントスタイルおよび問題行動の経験にどのような差異があるかを検討した。

今回協力いただいた B 高等学校は、経済面では就学支援金を受給する必要のある生徒が 95%に達し、大半の生徒が卒業後、就職していく。授業においては、基礎学力の充実に力を入れており、「学び直し」を軸に決め細やかな教育が行われている高等学校である。

また、C 高等学校は、生徒の大半が進学を希望する中堅の高等学校である。そこで、分析 2 では、B 高等学校と C 高等学校の 2 校を校種別に分析することとした。

幼少期のアタッチメント対象に関して

B 高等学校と C 高等学校の幼少期のアタッチメント対象に差があるかどうかについて t 検定を行ったところ（表 11）、『母』、『父』、『祖母』及び『祖父』において有意な差が見られた（母； $t=2.48, p<.05$, 父； $t=4.41, p<.01$, 祖母； $t=2.59, p<.01$, 祖父； $t=2.64, p<.01$ ）。

また、対象人数においても有意な差が見られた。（ $t=3.49, p<.01$ ）。

表11 B校、C校の幼少期のアタッチメント対象の比較

		B高校	C高校	t 値	
母親	M	0.93	< 0.98	2.48	*
	(SD)	(0.25)	(0.14)		
父親	M	0.72	≪ 0.87	4.41	**
	(SD)	(0.45)	(0.34)		
祖母	M	0.55	≪ 0.65	2.59	**
	(SD)	(0.50)	(0.48)		
祖父	M	0.43	≪ 0.53	2.64	**
	(SD)	(0.50)	(0.50)		
対象人数 (平均)	M	3.47	≪ 3.96	3.49	**
	(SD)	(1.77)	(1.79)		

* $p<.05$, ** $p<.01$

幼少期のアタッチメントスタイル得点に関して

幼少期のアタッチメントスタイル得点の安定得点、拒否得点及びアンビバレント得点に関して、B 高校と C 高校で差があるかどうかについて t 検定を行ったところ（表 12）、安定と拒否の合計得点において有意な差が見られた（安定； $t=2.96, p<.01$, 拒否； $t=4.05, p<.01$ ）。

また、アンビバレント得点の合計は、有意差はなかった（ $t=1.79, n.s.$ ）。

表12 B高校とC高校の幼少期のアタッチメントスタイルの比較

		B高校 <i>M(SD)</i>	C高校 <i>M(SD)</i>	<i>t</i> 値	
安定	1私は、その人のそばでは安心感があった。	3.57 (0.77)	3.78 (0.56)	3.55	**
	2その人と遊ぶのが楽しかった。	3.31 (0.89)	3.55 (0.71)	3.61	**
	3その人と出かけるのが嬉しかった	3.45 (0.83)	3.62 (0.66)	2.63	**
	4私は、その人が好きだった。	3.45 (0.87)	3.71 (0.62)	4.15	**
	5私は、よくその人にほめられた。	3.12 (0.86)	3.33 (0.80)	3.10	**
	6私は、その人が何をしていた、それに関心がなかった。	2.21 (0.94)	1.85 (0.83)	4.97	**
合計		19.08 (3.35)	19.84 (2.62)	2.96	**
拒否	7私は、その人の愛情が薄いと思った時があった。	1.80 (1.03)	1.55 (0.85)	3.24	**
	8いつか世話をしないで放っておかれるのではないかと思った。	1.79 (1.04)	1.43 (0.77)	4.69	**
	9助けてほしいときに、その人は助けてくれないことがあった。	1.78 (1.02)	1.54 (0.86)	3.09	**
	10私が泣いていても、その人は私に関心がなかった。	1.50 (0.86)	1.28 (0.61)	3.33	**
	11私は、同じことをしても怒られる時と、怒られない時があった。	2.04 (1.03)	1.99 (0.99)	0.58	<i>n.s.</i>
	合計	8.95 (3.71)	7.79 (3.07)	4.05	**
アンビバレント	12その人が出かける時には、私は無理やりついていこうとした。	1.91 (1.02)	2.07 (1.01)	1.88	<i>n.s.</i>
	13幼稚園(保育所)に行っても、その人を思い出してずっと泣いていたことがあった。	1.85 (1.04)	1.99 (1.10)	1.67	<i>n.s.</i>
	14親戚の家に遊びに行っても、その人がいないと、怖かった。	1.85 (1.05)	2.01 (1.07)	1.91	<i>n.s.</i>
	15その人がそばにいないと、夜眠れなかった。	1.84 (1.07)	1.81 (0.99)	0.39	<i>n.s.</i>
	16何かあれば、その人はすぐに来てくれると思っていた。	2.44 (1.13)	2.76 (1.06)	3.53	**
	合計	7.43 (3.08)	7.88 (3.07)	1.79	<i>n.s.</i>

* $p<.05$, ** $p<.01$

現在のアタッチメント対象に関して

次に、現在のアタッチメント対象に差があるかどうかについて、B高校とC高校で t 検定を行ったところ（表13）、『母』、『父』、『彼氏彼女』、『小学校の先生』及び『中学校の先生』において有意な差が見られ（母； $t=3.38$, $p<.01$, 父； $t=4.47$, $p<.01$, 彼氏彼女； $t=3.13$, $p<.01$, 小学校の先生； $t=2.21$, $p<.05$, 中学校の先生； $t=3.58$, $p<.01$ ）、『友だち』と『高校の先生』には差がなかった（友だち； $t=1.93, n.s.$, 高校の先生； $t=0.59, n.s.$ ）。

表13 B高校、C高校の現在のアタッチメント対象の比較

		B高校	C高校	<i>t</i> 値	
母	<i>M</i>	0.81	0.91	3.38	**
	(<i>SD</i>)	(0.40)	(0.29)		
父	<i>M</i>	0.59	0.76	4.47	**
	(<i>SD</i>)	(0.49)	(0.43)		
友だち	<i>M</i>	0.79	0.85	1.93	<i>n.s.</i>
	(<i>SD</i>)	(0.41)	(0.36)		
彼女彼氏	<i>M</i>	0.27	0.17	3.13	**
	(<i>SD</i>)	(0.45)	(0.37)		
小学校の先生	<i>M</i>	0.06	0.11	2.21	*
	(<i>SD</i>)	(0.25)	(0.32)		
中学校の先生	<i>M</i>	0.13	0.23	3.58	**
	(<i>SD</i>)	(0.33)	(0.42)		
高校の先生	<i>M</i>	0.15	0.17	0.59	<i>n.s.</i>
	(<i>SD</i>)	(0.36)	(0.37)		
対象人数 (平均)	<i>M</i>	3.98	4.98	6.02	**
	(<i>SD</i>)	(1.97)	(2.38)		

* $p < .05$, ** $p < .01$

現在のアタッチメントの回避および不安の傾向に関して

次に、現在のアタッチメントの回避と不安の傾向に関して、B高等学校とC高等学校で差があるかどうかについて t 検定を行ったところ（表 14）、回避の合計得点においては有意な差が見られず（ $t=1.67$, $n.s.$ ）、不安の合計得点においては有意な差が見られた（ $t=4.15$, $p<.01$ ）。

B校、C校において、現在のアタッチメント傾向の回避得点に有意な差が見られなかったため、さらに、B校とC校の幼少期アタッチメント拒否得点における低群、中群、高群を独立変数とし、現在のアタッチメント傾向の回避得点を従属変数として分散分析を行った（表 15、図 1 参照）。2 要因の分散分析を行った結果、拒否得点の低群、中群、高群の主効果が有意であった（ $F(2,5)=18.60$, $P<.01$ ）。また、学校間と拒否得点の低・中・高群の間の交互作用には主効果はみられなかった（ $F(2,5)=1.78$, $n.s.$ ）。

なお、B校とC校における拒否得点の低群、中群、高群の回避傾向得点の平均値を比べると、B校において、拒否得点低群と中群ではほとんど差が見られず（低群； $M=9.90$, 中群； $M=10.00$ ）、しかし、高群においては急激に高くなっていて（ $M=12.15$ ）、C校の高群（ $M=11.42$ ）をも上回っていた。

表14 B高校とC高校の現在のアタッチメント傾向の比較

		B高校	C高校		
		<i>M(SD)</i>	<i>M(SD)</i>	<i>t</i> 値	
回避	1 いろいろなことについて、その人と話し合う。	3.48 (0.88)	3.57 (0.73)	1.53	<i>n.s.</i>
	3 自分の本心を、その人に話す気がしない。	1.81 (0.97)	1.72 (0.91)	1.15	<i>n.s.</i>
	4 困ったことや心配事があれば、たいてい、その人に話す。	3.12 (1.07)	3.12 (0.97)	0.02	<i>n.s.</i>
	5 自分のことについて「多く」をその人に話すことは、気が進まない。	1.97 (1.04)	1.91 (0.98)	0.79	<i>n.s.</i>
	7 つらいときは、その人に話すと楽になる	3.08 (1.04)	3.20 (0.88)	1.51	<i>n.s.</i>
	9 気軽にその人を頼れる。	3.26 (0.95)	3.49 (0.77)	3.08	**
	合計	10.78 (4.18)	10.25 (3.76)	1.67	<i>n.s.</i>
不安	2 その人は、自分をあまり好きではないかもしれない。	2.01 (1.06)	1.68 (0.92)	4.29	**
	6 自分がその人のことを大切に思うのと同じくらいに、その人が自分を大切に思っているのか、気になる。	2.53 (1.16)	2.27 (1.12)	2.80	**
	8 自分がその人に本当に愛されているのか心配だ。	2.00 (1.13)	1.72 (0.95)	3.22	**
	合計	6.55 (2.76)	5.58 (2.52)	4.15	**

* $p < .05$, ** $p < .01$

表15 幼少期拒否得点による回避得点の平均およびS.D.

	拒否得点					
	低群		中群		高群	
	B校	C校	B校	C校	B校	C校
<i>M</i>	9.90	9.29	10.00	10.66	12.15	11.42
<i>SD</i>	3.87	3.54	3.34	3.70	4.37	3.80
人数	62	262	52	133	80	173

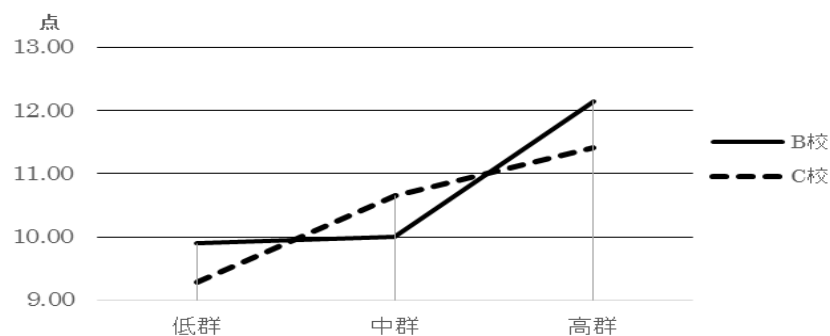


図1 B校C校の拒否低・中・高群の回避得点平均のプロット

B 高等学校及び C 高等学校の生徒の問題行動の経験に関して

次に、問題行動の「粗暴的問題行動（対人）」、「粗暴的問題行動（対物）」、「自己中心的問題行動」及び「非粗暴的問題行動」に関して、B 高等学校と C 高等学校で差があるかどうかについて t 検定を行ったところ（表 16）、「粗暴的問題行動（対人）」、「粗暴的問題行動（対物）」および「自己中心的問題行動」の合計得点において有意な差が見られた（粗暴的問題行動（対人）； $t=2.58$, $p<.01$ 、粗暴的問題行動（対物）； $t=2.77$, $p<.01$ 、自己中心的問題行動； $t=11.56$, $p<.01$ ）。しかし、「非粗暴的問題行動」の得点には、有意な差は見られなかった（ $t=1.83$, $n.s.$ ）。

表16 B高校とC高校の問題行動経験の比較

		B高校		C高校	t 値	
		$M(SD)$		$M(SD)$		
粗 暴 的 （ 対 人 ）	からかわれたらたたいたりけったりする	0.79 (0.81)	➤	0.65 (0.75)	2.31	*
	からかう	0.57 (0.73)	➤	0.46 (0.64)	2.19	*
	他の生徒に無理やりやらせる	0.28 (0.53)		0.22 (0.47)	1.46	$n.s.$
	人に乱暴なことをする	0.68 (0.72)	➤	0.55 (0.66)	2.42	*
	たたかれたら、たたき返す	1.23 (0.83)		1.18 (0.83)	0.87	$n.s.$
合計		3.56 (2.66)	➤	3.03 (2.39)	2.72	**
対物						
ものを壊す		0.33 (0.55)	➤	0.22 (0.46)	2.99	**
自 己 中 心 的	理由もなく遅刻	0.97 (0.85)	➤	0.19 (0.46)	12.71	**
	授業中に抜け出す	0.51 (0.65)	➤	0.19 (0.45)	6.72	**
	異装	0.86 (0.89)	➤	0.42 (0.62)	6.57	**
	夜遊び	1.04 (0.91)	➤	0.61 (0.85)	6.08	**
	喫煙	0.25 (0.55)	➤	0.04 (0.21)	5.46	**
合計		3.59 (2.53)	➤	1.44 (1.66)	11.56	**
非 粗 暴 的	友達をいじめたり、仲間はづれにする	0.33 (0.55)	>	0.24 (0.44)	2.30	*
	遊ぶ相談に入れない	0.24 (0.49)		0.18 (0.42)	1.69	$n.s.$
	わざと隠す	0.26 (0.54)		0.25 (0.51)	0.11	$n.s.$
	嫌われるような噂話をする	0.39 (0.61)		0.34 (0.56)	1.06	$n.s.$
合計		1.22 (1.51)		1.01 (1.40)	1.83	$n.s.$

* $p<.05$, ** $p<.01$

2 考察

幼少期のアタッチメント対象に関しては、B 校も大半の生徒は母親を選んでいるが、父親を選ぶ生徒が 7 割強と少なく、さらに祖父母を選ぶ生徒が C 校に比べて少なかった。これらの結果は、子どもの養育に関わる大人の数が少ないことを示していて、同時に、母親の周りに養育をサポートしてくれる人がいないのではないかと推測される。

幼少期のアタッチメントスタイルに関しては、この尺度が、幼少期に養育者

とどのような関わりが持たれたかを測る尺度であるが、アタッチメントスタイルの安定傾向を表す項目は、幼少期に養育者と良好な関係を持っていたことを反映する項目（酒井，2001）で、C校が有意に高い。拒否傾向を測る項目は、幼少期に、養育者が無関心であるか、または拒否的な関わりを持っていたことを反映している項目である。この項目はB校が有意に高くなっていて、B校の生徒が、小学校入学前の養育者との関係においてC校の生徒と比べて、養育者を頼らないで育ってきたか、または頼れる人がいなかったことを表しているといえる。

現在のアタッチメント対象に関しては、“彼女彼氏”以外は、C校の生徒の方が選ぶ生徒が多く、アタッチメント対象の人数もC校が4.98人であるのに対し、B校では3.98人と差があり、B校の生徒の人間関係の希薄さが伺われる。

学校の先生に関しては、“小学校の先生”と“中学校の先生”はC校の方が選ぶ生徒が多かったが、“高校の先生”は、B校とC校に有意な差がなかった。このことから、B校の生徒もC高の生徒と同程度に、小学校や中学校におけるより、高校の先生と良好な関係が築けているということが推測できる。

現在のアタッチメントの回避および不安の傾向に関しては、B校とC校の回避得点の平均値を比較した際、回避項目の“気軽にその人を頼れる。”を除く項目は、C校と比べて差がなかった。B校とC校の生徒が高校生であり、青年期という発達段階に位置していることから、養育者から離れて（回避して）自己のアイデンティティを確立していく段階にいたるために差がなくなっていると考えられる。しかし、分散分析の結果、幼少期の拒否得点低群、中群及び高群の現在の回避得点の平均値を比較すると、低群と中群が近接し、一方、高群は上昇するという2極化が見て取れる。この意味では、拒否中群の回避傾向が低くなっていると考えられる。この結果から、幼少期の時点で、養育者に中程度に無関心で拒否的な関わりを持たれ、あまり養育者を頼らずに、または頼れる人があまりいない状況で成長してきたB校の生徒が、先生に関わってもらう中で、C校の生徒と同様に、他者を信頼してもよいと思えるようになってきていることを示していると考えてもよいのではないだろうか。しかし、幼少期の拒否得点が高い生徒にとっては他者を信頼することはやはり難しく、“気軽にその人を頼れる。”の項目において、C校と差があるということは、他者を信頼して『話す』ことはできても、以前として他者に『頼りきれない』B校の幼少期拒否得点高群の生徒の生きづらさを物語っているといえよう。

さらに考えるに、B校の生徒は、前述したように高等学校で教育を受けるに、95%の生徒が就学支援金を受給しなければならないほど経済的に厳しく、また、養育者をサポートする環境も不十分な中で育ってきている。それに端を発して低学力となってしまう、小学校や中学校で落ちこぼれてしまった生徒が主であると考えられる。そのため、進学希望が大半の中堅校であるC校よりも逆境で育ってきていると推測する。この環境下で育ってきたB校の拒否得点中群の生徒は、C校の拒否得点中群の生徒とは、拒否傾向において質的に差があるので

はないだろうか。そのような生徒であっても、B校の先生方と出会う中で、アタッチメントの修正ができたということを、この結果は示しているのではないだろうか。

しかし、B校の不安傾向の項目得点は、C校より高くなっている。ここで問われている不安は、人との付き合いにおける不安であり、B校の生徒の自己受容を取り巻く環境が悪いことが伺える。これは、B校の生徒が、周りの人との暖かい関わりの中で、他者を信頼しようとしながらも、自己が受け入れられるかどうかという不安を抱えていると考えられ、やはりB校の生徒の自己受容の困難さを表しているように思われる。

問題行動の経験に関しては、粗暴的問題行動（対人）の“他の生徒に、嫌がることを無理やりやらせる。”の項目と、非粗暴的問題行動の項目において、「一度もしたことがない」を選んだ生徒はC校の生徒と差がなく多かった。

“タバコをすう。・深夜に夜遊びをする。・授業中に教室を抜け出す。・理由もなく学校に遅れていく。・ブカブカにズボンははくとか、スカートを短くするなど、標準服をくずして着る。”という質問項目でC校より有意な差が出たが、この項目は、自己中心的問題行動であり、他者に向けられるものではない。

“からかわれたらたたいたりけったりする。・他の生徒の欠点や弱点をしつこくからかう。・たたかれたら、たたき返す。”という粗暴的問題行動（対人）および“ものを壊す。”という粗暴的問題行動（対物）がC校の生徒より得点が高かったが、これらの問題行動は他者に向けられる問題行動といえるが、“他の生徒に、嫌がることを無理やりやらせる。”で、C校と差がなく「一度もしたことがない」を選ぶ生徒が多かったことから推測すると、学校での遊びの延長であり、生徒なりのストレス低減の対処行動である。生徒の気持ちの中に彼ら独特の対人関係の接触方法がある考えられる。すなわち、「嫌がることはやってはいけない」という最低限の節度を守っており、なんらかの安全弁のようなものが働いていると思われる。それが仲間意識につながっているといえよう。生徒がこのような考えるのは、学校が救いの場になっているからであり同時に先生方が見守ってくれているという安心感があるからと考えられる。

Ⅶ まとめの考察

アタッチメントは、「自分は人から愛される存在であり（自己受容）、他者は自分を愛してくれる存在である（他者信頼）」という対人関係のありようの基盤であり、生後6ヶ月から5歳ぐらいまでの養育者とのかかわりが重要であるといわれる。幼少期の養育者との関係が弱いとその基盤は弱く、自己受容も他者信頼ももろいものとなり、生涯にまで影響するといわれている。しかし、アタッチメントは再形成が可能で、養育者以外の人が代替することによっても、修正されていくといわれている。本研究の分析2における、B校とC校の比較から考えるに、この代替者として、保育者や、小中学校の先生と共に、高等学校の教師も加わることができるかと確信する。高校生活はわずか3年と短い、子

どもから大人への移行期でもあり、とても大切な時期といえる。そのような大切な時に、教師やさまざまな大人たちと良好な関わりを持つ中で、アタッチメントを修正し再形成することでできれば、その後の人生で、生徒は自己を信じ、他者を信頼して生きていく基盤を築くことができるといえよう。

謝辞

本研究の調査にご協力くださった B 高等学校ならびに C 高等学校先生方、ありがとうございます。また、本調査にご協力くださいました B 高等学校ならびに C 高等学校の生徒の皆さん、ありがとうございます。そして、本研究論文作成にあたり、ご指導くださいました、谷向教授ならびに相谷教授、ありがとうございます。

引用文献

- Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- 青柳肇・酒井厚 (1997). アダルト・アタッチメントと回想によるよう初期のアタッチメントとの関係. 早稲田大学人間科学研究紀要. 10. 7-16
- Bowlby, J. (1969/1982). Attachment and Loss, Vol. 1. Attachment. New York :Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). Attachment and Loss, Vol.2: Separation: Anxiety and Anger. New York : Basic Books.
- Brenning, K. Soenens, B. Braet, C. Bosmans, G., (2011). An Adaptation of the Experiences in Close Relationships Scale-Rvised for use with children and adolescents. Journal of Social and Personal Relationships, 28(8),1048-1072
- Collins, N. L. & Read, S. J. (1990). Adult attachment, working model, and relationship quality in dating couples. Journal of Personality and Social Psychology, 58, 644-663
- 遠藤利彦. (2005). アタッチメント理論の基本的枠組み. 数井みゆき・遠藤利彦 (編)、アタッチメント生涯にわたる絆. 京都: ミネルヴァ書房. 1-31
- Fralery, R. C., Heffrman, M. E., Vicary, A. M. & Brumaugh, C. C. (2011). The Experiences in Close Relationships-Relationship Structures Questionnaire: A method for assessing attachment orientations across relationships. Psychological Assessment, 23(3), 615-625
- Hazan, C. & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. Journal of Personality and Social Psychology, 52, 511-524
- 金子泰之 (2006). 中学校の問題行動の生起に及ぼす動機の影響. 犯罪心理学

- 研究、44（特別号）、126-127
- 粕谷貴志・菅原正和（2001）. 中学生の内的作業モデルと学校適応との関連.
岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要. 11. 137-145
- 加藤弘通・大久保智生（2006）. 問題行動をする生徒および学校生活に対する
生徒の評価と学級のあれとの関係. 教育心理学研究、54、34-44.
- 牧野真由子（2016）. 高校生における愛着スタイルと感情抑制の関連. 金城大
学大学院紀要. 16. 21-25
- Mikulincer, M. (1998). Adult attachment style and individual differences
in functional versus dysfunctional experiences of anger. *Journal of
Personality and Social Psychology*, 74, (2), 513-524.
- 中尾竜馬・数井みゆき・村上達也（2016）. 簡易型児童版アタッチメント尺度
（ECR-RC9）の作成（1）－因子構造及び内的整合性の確認－. 日本教育
心理学会. 58、311
- 坂井明子・山崎勝之（2004）. 小学生用 P-R 攻撃性質問紙の作成と信頼性、妥
当性の検討. 心理学研究 75, 254-261
- 酒井厚（2001）. 青年期の愛着関係と就学前の母子関係－内的作業モデル尺
度作成の試み. 性格心理学研究. 9. 2. 59-70
- 佐藤朗子（1993）. 青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関
連. 名古屋大学教育学部紀要. Vol. 40, 215-226
- Shaver, P. R., & Mikulincer, M. (2002). Attachment-related psychodynamics.
Attachment and Human Development, 4, 133-161
- Sroufe, L. A., Waters, E. (1977). Attachment as an organizational
construct. *Child Development*, 56, 1-14
- van IJzendoorn, M. H., Sagi, A., & Lambermon, M. W. E. (1992). The
multiple caretaker paradox: Data from Lolland and Israel. In R. C.
Pianta (Ed.), *Beyond the parent: The role of other adults in
children's lives*. *New Directions for Child Development*, 57, 5-24, San
Francisco: Jossey-Bass.